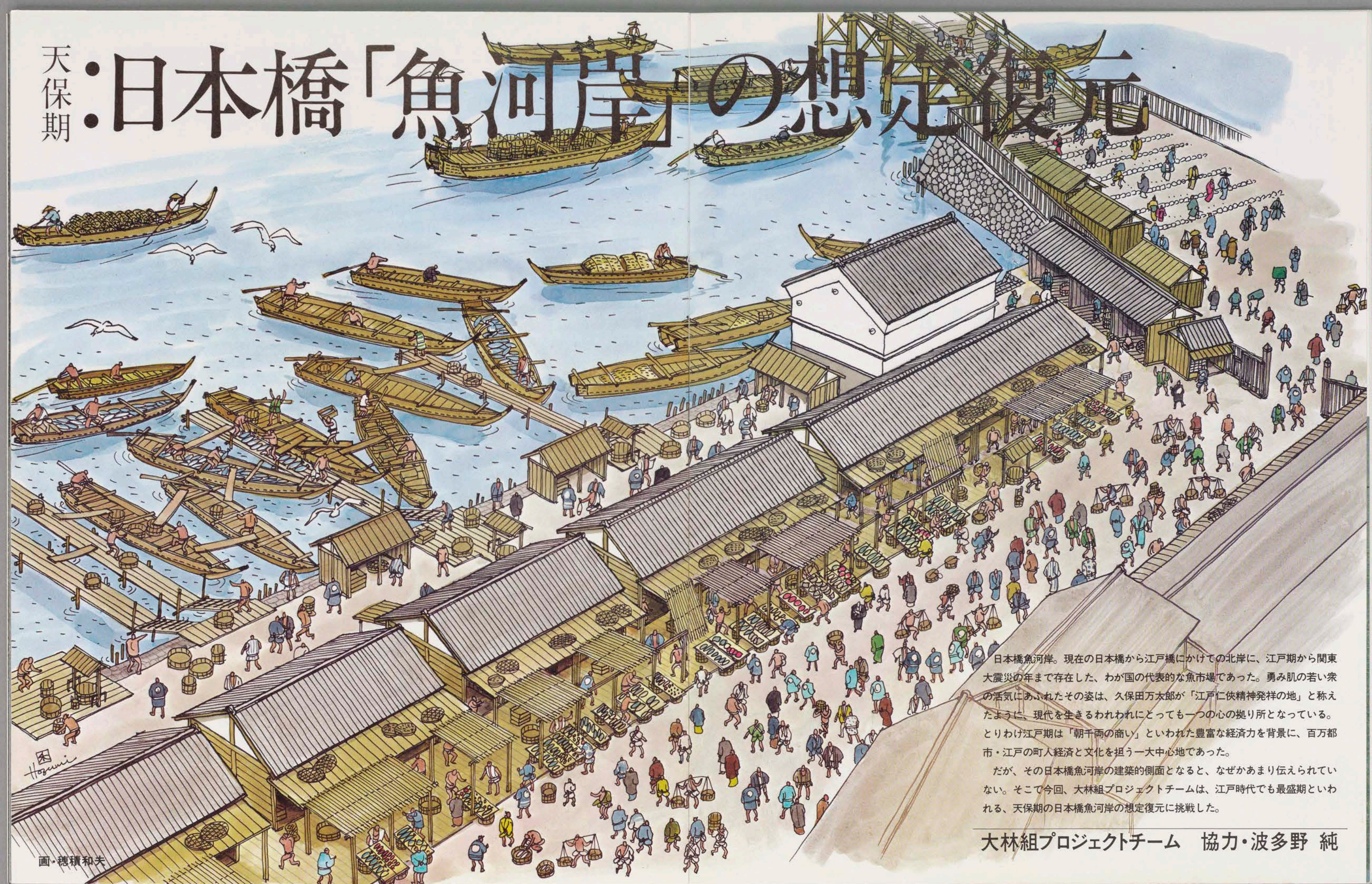


天保期

日本橋「魚河岸」の想定復元



日本橋魚河岸。現在の日本橋から江戸橋にかけての北岸に、江戸期から関東大震災の年まで存在した、わが国の代表的な魚市場であった。勇み肌の若い衆の活気にあふれたその姿は、久保田万太郎が「江戸に依精神発祥の地」と称えたように、現代を生きるわれわれにとっても一つの心の拠り所となっている。とりわけ江戸期は「朝千両の商い」といわれた豊富な経済力を背景に、百万都市・江戸の町人経済と文化を担う一大中心地であった。

だが、その日本橋魚河岸の建築的側面となると、なぜかあまり伝えられていない。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、江戸時代でも最盛期といわれる、天保期の日本橋魚河岸の想定復元に挑戦した。

大林組プロジェクトチーム 協力・波多野 純

画・穂積和夫

図
Hozumi

一、日本橋魚河岸の成立



日本橋魚河岸の記念碑

日本橋魚河岸の始まり

現在の日本橋のたもとに、一つの記念碑が残っている。「本船町小田原町安針町等の間、悉く鮮魚の肆なり、遠近の浦々より海陸のけじめもなく鱈魚ここに運送して日夜に市を立て甚賑えりと江戸名所図会にのこれる日本橋の魚市魚河岸のありしはこのあたりなり（後略）」

この碑文は、日本橋魚河岸の成立が、天正年間に徳川家康と共に江戸入りした大阪の漁師たちによることを伝えている。

徳川家康が関東首府・江戸に入城したのは、天正十八年（一五九〇）のことであった。その時、一緒に江戸入りした家臣や町民の中に、摂津国（大阪）西成郡、佃村の名主・森孫右衛門を始めとした三十四名の漁師たちがいた。森一族は平川村小田原河岸（小田原町）を拝領し、のちには「江戸の河海いずこたりとも、舟底一尺までの岸辺に網立て勝手」という特権を与えられた。当時の江戸

が、櫓の音を海上に響かせながら入ってくる。押送船と呼ばれる快速の運搬船だ。江戸湾内はもろろんのこと、房州、相模の浦からも次々とやって来る。積み荷は、春なら真かれい、はも、かんばち。夏はかつおに、あじ、すずき。秋はさば、さけ、さんま、たい。冬にはしび（まぐろ）、ます、かに、あんこう。

やがて押送船は、速度を上げて日本橋川をぐいぐい漕ぎ過ぎていく。まもなく右手に、日本橋魚河岸が見えてくる。川の中に突き出した細い棧橋。そこには、平田船と呼ばれる浮き棧橋代わりの荷揚げ用の船が、ズラリと並んでいたりともいわれる。

棧橋に押送船が着くと、待ちかまえていた問屋の若い衆がどっと飛び出してくる。威勢のいい掛け声と共に魚荷を受け取り、犬走り（棧橋）をトントンと踏んで手際良く運び入れる。問屋の数は、寛永期でざっと四〇軒以上。それが享保の頃には、河岸の中心・本船町だけでも二二八軒にもなっていた。問屋はあらかじめ、持浦といって各地の漁村の網元や在方問屋と契約し、魚を確保してある。荷は次々と決められた問屋に運ばれ、売るための仕分けがされる。運搬と仕分け。それはまるで喧嘩のような活気と騒々しさに満ちている。

魚河岸の初期の頃、問屋は自分で魚を売った。のちに「請下」と呼ばれる仲買人が登場した。仲買人の商売のやり方はちよつと変わっている。問屋から魚を預かると、板舟という台に並べて商売を始める。板舟は、定寸が幅二尺三寸長さ五尺。この小さな台の上が、仲買人の唯一の商いの場だ。魚が並ぶまもなく、詰めかけた買出人との間で、直交渉が始まる。いわゆるセリはない。買出人は自分の言い値を、そつと仲買人に耳打ちする。これが河岸でいうところの「耳遣り」だ。値段は、板舟を挟んで、仲買人と買出人との駆け引き次第。こうして魚を売り払ってしまい、朝市が引けると、それから問屋と仲買人との価格交渉が始まる。つまり仲買人は、自分の才覚で魚を売ってしまつてから、仕入れの交渉をするのだ。

江戸は、関西と比較してまだ漁法も稚拙で、大規模な漁業は行われていなかったが、この頃から鱈が大量に採れ始め、未知の漁場として大きな価値を持つようになっていた。その江戸湾の漁業権を、森一族は独占したのである。そして、孫右衛門の長男九右衛門が本小田原町において、幕府上納の魚の残りを一般に販売する許可を得た。これが日本橋魚河岸の始まりとされている。

だが実際には、森一族は単なる漁師ではなく、もとは大阪近辺の漁業権を守る水軍であったともいわれる。早くから家康の家臣として活躍し、江戸でもやはり軍事的役割を担った。江戸湾における漁業独占権は、海上監視のためとも考えられている。森一族の一部はのちに江戸湾内に島を拝領し、そこを故郷の地名から佃島と名付けて江戸名物の白魚漁を始めることになるのだが、それもまた海上監視の最前線を担ったものであった。

つまり当初の日本橋魚河岸は、やがて迎える天下分け目の戦いを前に、緊張した時代と武士社会の下に生まれ、大いなる副産物だったのである。

江戸の町造りと魚河岸

森一族の素性に関してはさておき、こうして日本橋魚河岸は森九右衛門を開祖として誕生した。しかし、それはいつのことだったのだろうか。歴史上あまりにも有名な魚河岸だが、ちょうど江戸の町造りの混乱期とも重なり、正確な年代はいまだに判明していない。魚河岸という名称がいつできたのか、それすら分かっていないのである。

徳川家康は江戸入りするとすぐに、城下町としての都市整備を開始し、道三堀の開削を実施した。そのあたりは、太田道灌時代から四日市が開かれた所であり、やがて江戸における商業の端緒ともなった。やがて日本橋川が開削され、江戸湾からさまざまな物資が運送されるようになる。森九右衛門が魚類販売の許可を得たのは、この頃といわれるが、当時の河岸は石の荷揚げ場として利用されていて、まだ魚河岸でない。

それだけに、やり方一つで旨味のある商売ができる。享保期で仲買人の数、本船町通りに三二〇人。江戸の中期以降には、大きな力を持つようになった。

一方、棒手振りの魚屋や料理屋の板前などの買出人は、魚の買い付けが済むと汐待茶屋へ行って一服する。汐待茶屋は、棒手茶屋ともいって、いわば買出人のための待合所だ。魚河岸の初期には、その数三六軒。のちにはかなり増えたが、たいていは問屋や仲買人の関係者が経営していた。買出人が茶屋で待っていると、軽子たちが注文した魚をまとめ、そこまで持ってきてくれる。講談のヒーロー・一心太助のような棒手振りの魚屋は、そこで東の間の休憩を摂りながら、一日の商いに思いをめぐらせたことであろう。その頃には、魚河岸のほうはずつかり商いも終り、板舟の掃除も済んで、朝方の喧嘩が嘘のように静まりかえっているのだ。

魚河岸と江戸町人文化

魚河岸の表の顔を「勇み肌」の若い衆とすれば、裏で商業としての組織を支えていたのは、問屋の日那衆である。日本橋魚河岸に問屋組織を確立したのは、寛永年間に江戸にきた大和屋助五郎という商人だった。助五郎は本小田原町に住み、魚問屋の許可を幕府から受け、魚市場の基礎を確立したといわれる人物だ。

やがて日本橋魚河岸には、本小田原町、本船町、本船町横店、安針町の四組魚問屋ができた。江戸にはほかに、新肴場、芝金杉、本芝町の三問屋があった。落語や芝居の「芝浜」に出てくる河岸は、本芝町だ。これらを合わせて七組問屋といわれるが、日本橋魚河岸の四組問屋は別格で、あらゆる面にわたり絶大な権限を与えられていた。その上、魚河岸はそもそも発端が、幕府上納の魚を扱うことを建前としていただけに、誇りを持っていた。幕府の買い上げ価格があまりにも安いため、のちには上納制が問屋を苦しめることになったが、それでも「幕府御用」の看板は魚河岸に張りを与えてであろう。

『日本橋魚市場沿革紀要』によれば、「慶長七年（一六〇二）に売場を開いた」とある。また、慶長十二年には、道三堀岸にあった町家に移転が命じられ、多くの商家が日本橋川の近くに寄り住んだ。その時、道三堀町にあった魚商人たちが、本船町に集まったとも伝えられている。さらに慶長十四年（一六〇九）、船が難破して日本に漂着したスペインのルソン長官ドン・ロドリゴ・ヴィグエロは、その見聞記に「日本橋川のほとりて、漁師が大釜や樽に水を張り魚をひきさいていた」と記している。従ってこの頃になると、小規模ながらも魚の商いが付近で行われていたことが分かる。だが、まだ魚河岸と呼べるような状態ではなかったと推察されている。

では日本橋魚河岸は、いつ頃から魚河岸の形を整えたのであろうか。三田村鳶魚は「江戸ッ子」の中で「魚河岸は寛永度からこの辺（本小田原町、本船町、安針町等の界隈）のところにありました」と書いている。どの程度の規模をもって魚河岸と呼ぶかは難しいところである。だが、その他の資料からも、三代將軍家光の寛永年間（一六二四〜一六四三）には、おおよその形ができて上がり、元禄期の好景気を背景にして発展を遂げ、八代將軍吉宗の享保年間（一七一六〜一七三四）には完成。その後、紆余曲折はありながらも、天保年間（一八三〇〜一八四三）くらいまでは全盛時代が続いたと考えられているのである。

日本橋魚河岸の仕組み

全盛期の日本橋魚河岸は、駿河町の越後屋呉服店、吉原遊廓と並んで、日に千両の商いをするほどの活況を呈した。この三カ所は「朝、昼、夜、各千両」といわれ、江戸の町人経済の豊かさを代表する存在であったが、とりわけ魚河岸には江戸ッ子の見本ともいえる連中が集まり、町人世界のシンボルでもあった。いくつかの文献を総合しながら当時の魚河岸の様子を描写してみよう。

魚河岸の一日の始まりは、まだ明けきらぬ夜明け前の江戸湾である。そこに、各漁村で採れた魚を満載した船も、江戸町人の代表格であった。とりわけ、吉原遊廓との縁は深く、初めて遊女として客をとる新造の「突出し」には、数百両の御祝儀をポンと出したといわれる。この「突出し」を頼まれるのは、金銀座の役人と蔵前の札差のほかに、日本橋魚河岸、神田青物市場、新川の酒問屋の日那しかいがあったといわれ、これを頼まれるは一人前といった気風があった。また、芝居小屋との関係も深かった。河東節の作者・十寸見河東は、実は魚問屋の天満屋藤左衛門であり、寛延元年（一七四八）に二代目団十郎が河東節の出で「助六」を上演した時から、河東節を使用する時には必ず魚河岸へ挨拶した。これに対して魚河岸の日那衆は、芝居小屋に鉢巻と引幕を贈り、初日には全員で出掛けた。助六が花道で見得をきる場面になると、魚河岸連中が揃って手締めをしたという華やかさであった。

こうした問屋の中でも、活鯛問屋と鯉問屋はまた別格であった。活鯛問屋は、前述した大和屋助五郎が始めたもので、將軍家などに祝儀があると鯛は法外な高値で売れ、一日で二万両の商いをしたこともあったという。また、「將軍家御用」であれば、大名行列の前を横切っても構わない特権があり、伊達公の行列とはち合わせて喧嘩沙汰になった時にも、伊達家が詫状を入れたというエピソードまで残っている。また鯉は、出世魚として武家が珍重され、いつも深川の活洲で飼われていた。これが洪水などで流されて品不足となると、江戸市中のどこの家の池からでも鯉を採っていいことになっていた。その鯉問屋の鯉屋市兵衛が、実は杉山杉風といって、俳人・松尾芭蕉のスポンサーである。杉風が深川に持っていた活洲の番小屋を改造したのが、芭蕉庵。自らも俳人であった杉風は、そこを芭蕉に提供すると共に、終生、援助を続けたのである。

「かまくらを生きていてけん初かつを」（芭蕉）

二、日本橋魚河岸の想定復元

復元の範囲と時代設定

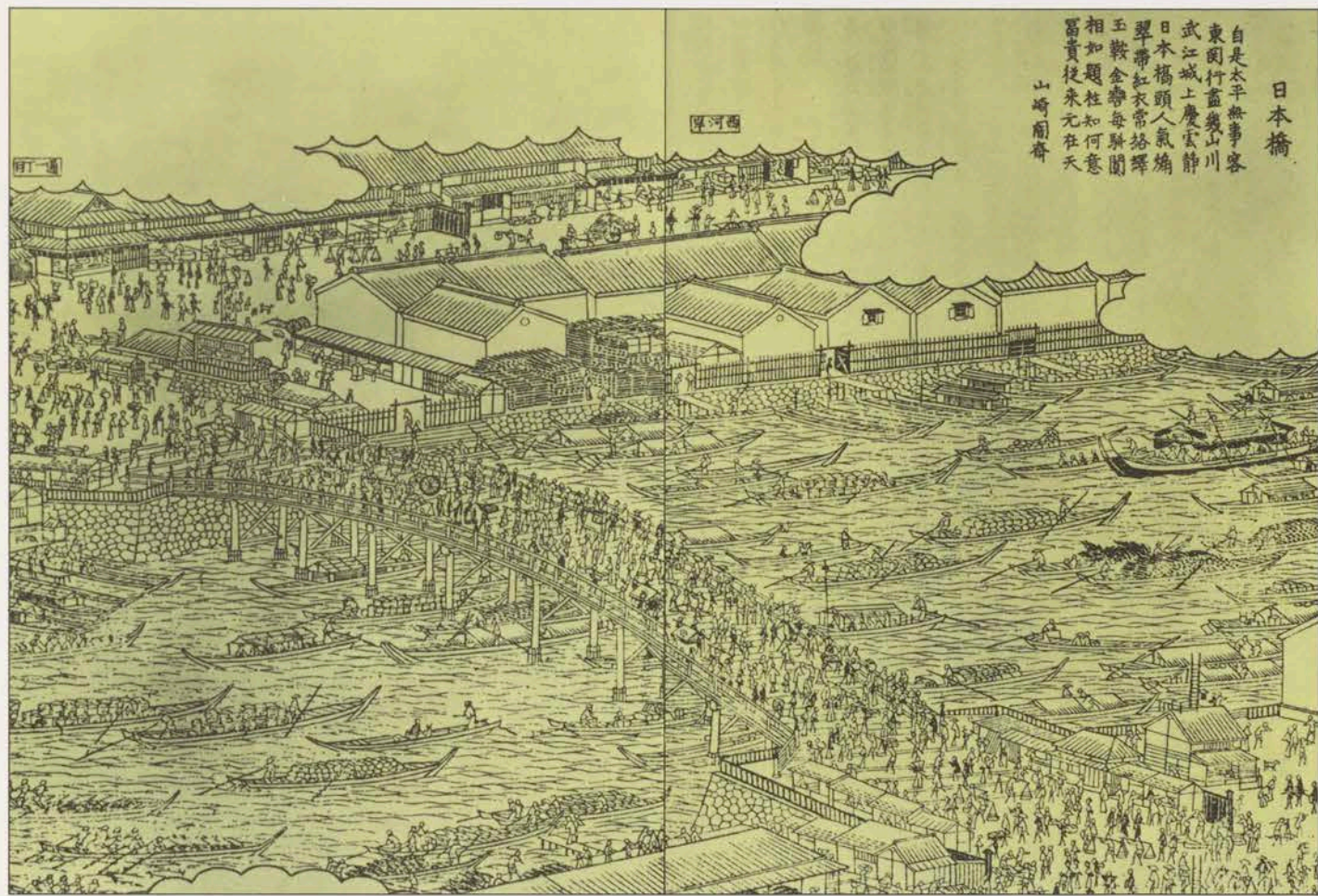
大林組プロジェクトチームによる今回の復元作業は、まず第一に復元の範囲及び時代設定の検討から始まった。世に名高い日本橋魚河岸とは、どこからどこまでを指すのであろうか。また、もともと魚河岸らしい地域は、どのあたりであろうか。そして時代はいつが良いのか。これらの点について明らかにするため、江戸期の浮世絵や文献の調査を行った。

歴史的に見ると、前述した日本橋魚河岸四組問屋の名称に、本小田原町、本船町、本船町横店、安針町とあるように、この一帯がいわゆる魚市場である。現在の地名でいえば、中央区日本橋室町一丁目を中心とした区域に当たる。そのうちの、日本橋から江戸橋にかけての北側の河岸が、かつての魚河岸。通り一つ隔てた向かいが本船町になり、その奥に小田原町と安針町があった。この界限には、荷揚げ場、問屋と仲買の店、汐待茶屋、魚の貯蔵場のほかに、幕府の御納屋役所、綿問屋、下り傘問屋、薬種問屋、足袋股引問屋、船具問屋などがあって、一大問屋街を形成していたことが文献から知られる。

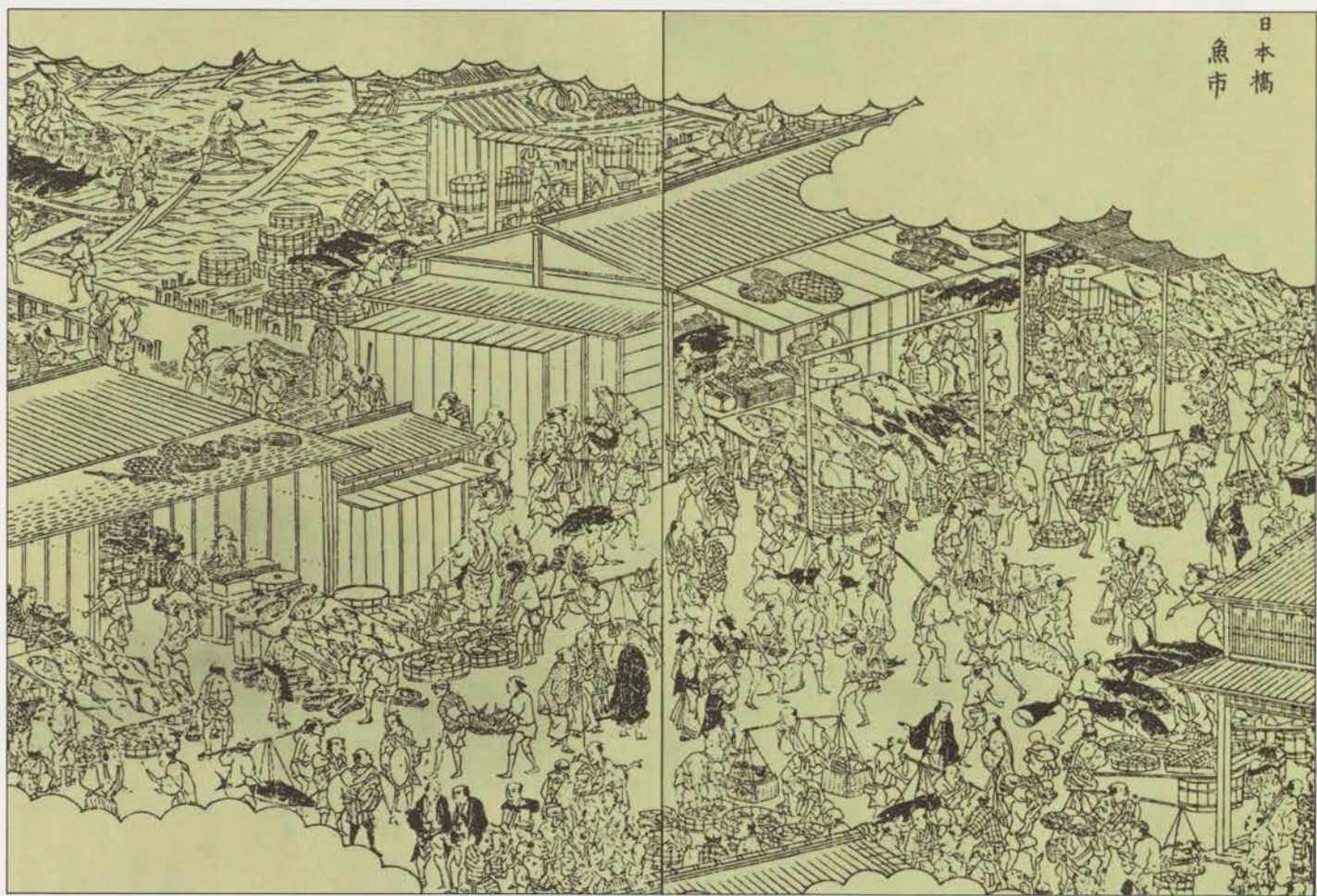
そこで同じ地域を浮世絵から探してみると、蕙斎、広重、北斎などに日本橋及び魚河岸を描いたものが少なくない。だが、本船町以北の汐待茶屋があったといわれる一帯に関しては不明瞭なものが多く、建築的な資料として参考にするにはあまりにも不確定要素が多くあった。一方、日本橋川沿いの魚河岸については、日本橋寄り部分の絵がいくつか残っていた。だが、その内容は浮世絵ごとかなり異なっている。これについては、魚河岸の建造物は官有地の上に建ついわば仮設店舗であり、火事、洪水、老朽化などの理由から、頻繁に建替えが行われたものと推察された。しかしまた、絵画的な演出もかなりあるように思われ、建築的な信用性には欠けるものが少なくなかった。

こうして作業は困難を極めたが、その中で、天保年間ものと推定される文献『肴納屋由緒』に、当時の問屋と思われる西宮九郎右衛門が記した一枚の平面図(図参照)があることが判明したのである。この図は、建築的な図というよりも、当時の権利関係を示したものである。しかし、建家の間口、奥行などがかなり正確に書かれていると判断できた。そこで、今回の復元は、『肴納屋由緒』にある図を基礎に、浮世絵、絵草子、文献などを総合的に検討しつつ、さらに波多野純・日本工業大学講師のご協力を仰いで、作業に当たった。

復元の範囲は、魚河岸のメイン・ストリートといわれる本船町通りの川側(納屋側)で、日本橋から安針町通りまで。時代は、徳川三百年の夢が覚めつつある、天保期である。

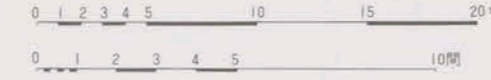


江戸名所図会「日本橋」

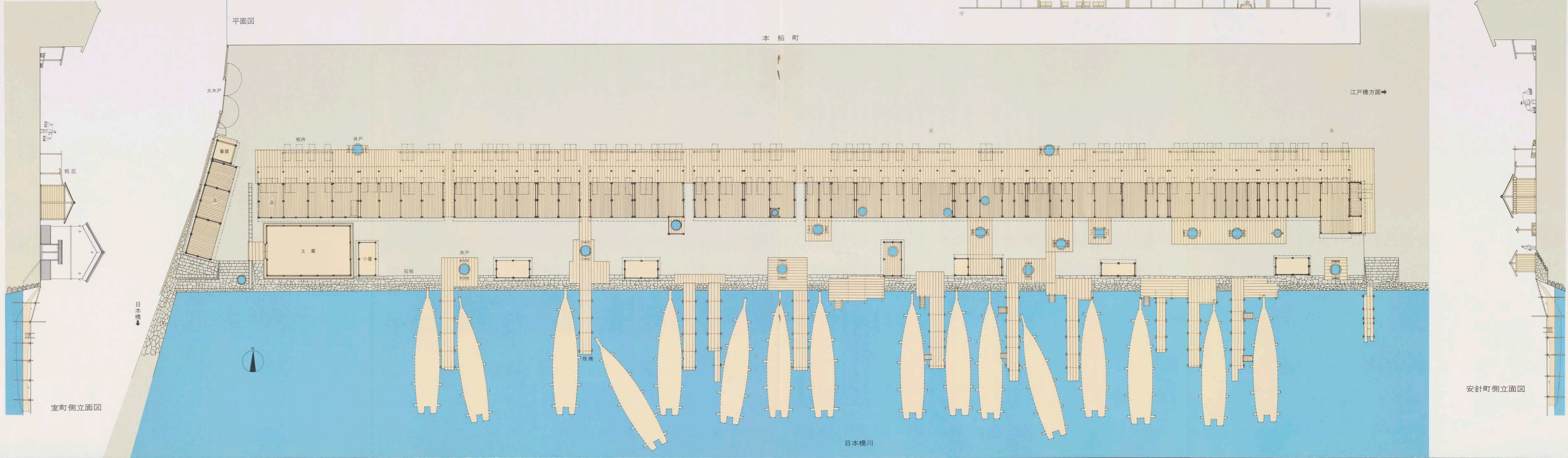
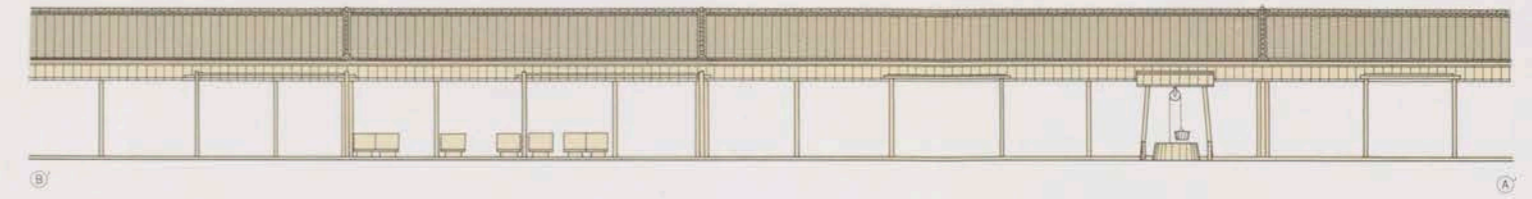


江戸名所図会「日本橋魚市」/日本名所図会全集(復刻版) 名著普及会刊

天保期：日本橋魚河岸の想定復元



北側立面図(部分)A-A B-B



安針町側立面図

●建物の形状について

魚河岸のもっとも魚河岸らしい部分ともいえる納屋(店)の形状については、『肴納屋由緒』の図と浮世絵との整合を検討しつつ決定した。

浮世絵については、すでに述べたように、建築的な視点からは信用性に乏しいものも少なくない。しかし、その中から、われわれプロジェクトチームが参考としたのは、まず『江戸名所図会』に長谷川雪旦が描いた「日本橋」(全景絵)と「日本橋魚市」(近景絵)である。これらの絵は、種々の資料との比較検討や、波多野純氏のアドバイスからも、建築的な資料として正確性が高いものと判断した。

また雪旦の「日本橋魚市」は、魚河岸の中でも本船町通りと安針町通りとの交差点付近の絵と考えられる。町内番屋の位置などを比較すると、『肴納屋由緒』の図面とも近く、これらの理由から今回の復元資料として採用した。

日本橋のたもとにある土蔵については、浮世絵によっては描かれていないものもあるが、**鍛形蕙齋**の『東都繁昌図巻』には土蔵らしき建物が見えること。また蕙齋の、『江戸景観図屏風』のような広範囲の構図にも、土蔵が描かれており、天保期に近い浮世絵に土蔵が見られること。さらに、『肴納屋由緒』の図には、はつきりと土蔵が書き込まれていることから、通常は存在したものと考えて復元した。

●建物の間口、奥行などについて

『肴納屋由緒』の権利図面を見ると、一店あたりの間口はかなり狭く、幅三尺(江戸間寸法)というものもある。ここに、前述したように幅一尺三寸の板舟を置いて商売したとなると、人が通る隙間もないことになる。現

代の常識ではとても考えられないが、江戸の見世にはそんな狭い間口がよくあったといわれる。そこで図面通りの間口を採用した。日本橋魚河岸では、当初は間屋が四〇軒ほどであったのが、のちには仲買も現れ、商売に旨味があったことも手伝って、その数は膨大なものになっていった。となると、新しい店舗を作る土地の余裕がなく、間口を次々と小さく割っていったとも考えられるであろう。

奥行に関しては、『江戸名所図会』の近景のプロポジションと、『肴納屋由緒』の図の板庇寸法から推定して、二間とした。

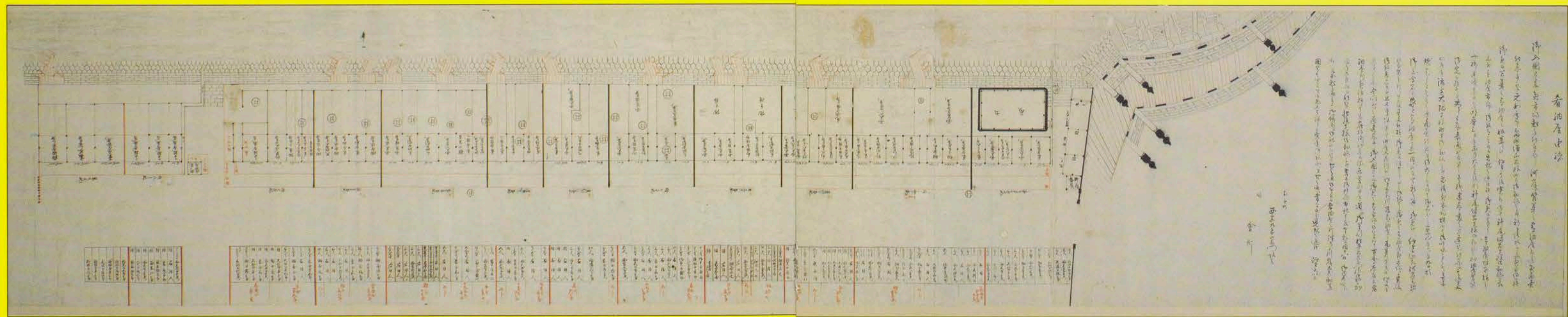
壁は、板壁で、『江戸名所図会』に外壁が横板貼りになっているのが見えることから、それを採用。各店舗間の仕切り壁は縦板貼りとした。

屋根は、天保期ともなると、仮設店舗ではあっても棧瓦であった可能性が高い。ただし、町家の瓦屋根については、一斉にそうならなかったわけではなく、場所によってはなかなか実現しなかったため、全てが棧瓦であったとは断定できない。ここでは二応、棧瓦とし、屋根勾配は四寸一四寸五分とした。

大切な商売の場である板舟の寸法は、たいていは幅二尺三寸長さ五尺だが、江戸橋寄りの地引き河岸では、長さ四尺五寸であったといわれる。こうした大きさの板に浅い縁を付け、水を打つてもこぼれないようにしたのが板舟である。商売物の魚は、この上に並べる。商売はここでしかできないから、板舟権という権利まで生まれたという。また、この板舟は、河岸が引けた後は立てかけて、雨戸の代わりにしたものであろう。

●敷地寸法について

本船町通りと河岸沿いの敷地については、万延元年(一八六〇)の地積図と明治十一年の地積図の二点を比較検討し、さらに地図研究家・中村静夫氏による嘉永期のこの付近の復元地図も参考としながら決定した。魚河岸の地は公儀(官有)の土地であったといわれ、二つの地積



「肴納屋由緒」(金子為雄氏蔵)



新作江戸期〔嘉永〕日本橋北室町本町辺之図（中村静夫氏編集）

図にはともに、日本橋から安針町通りまでの寸法が記載されている。ただし、この両図を見ると

| | (道路幅) | (敷地幅) | (総計) |
|----|-------|-------|------|
| 万延 | 十二・七 | 十二・四 | 二五・一 |
| 明治 | 八・〇 | 十六・〇 | 二四・〇 |

(単位はメートル)

という違いがある。

明治期の道路幅が大きく狭まったのは、納屋(店)の板庇と板流しの分だけ、いつのまにか前面にせり出して来たためと考えられる。これはいわば権利を主張している内に、次第に拡張してしまったもので、江戸期にはよく見られることであった。

とりわけ魚河岸は、権利関係が厳しい世界であったから、こうした事情は十分にありえるであろう。

板流しは『肴納屋由緒』の図にも見られるが、納屋の前面にあって、当時の舗装道路の役目を果たしていたと思われる。また、衛生的な観点からも、掃除や片付けがしやすいように作られたものでもあろう。

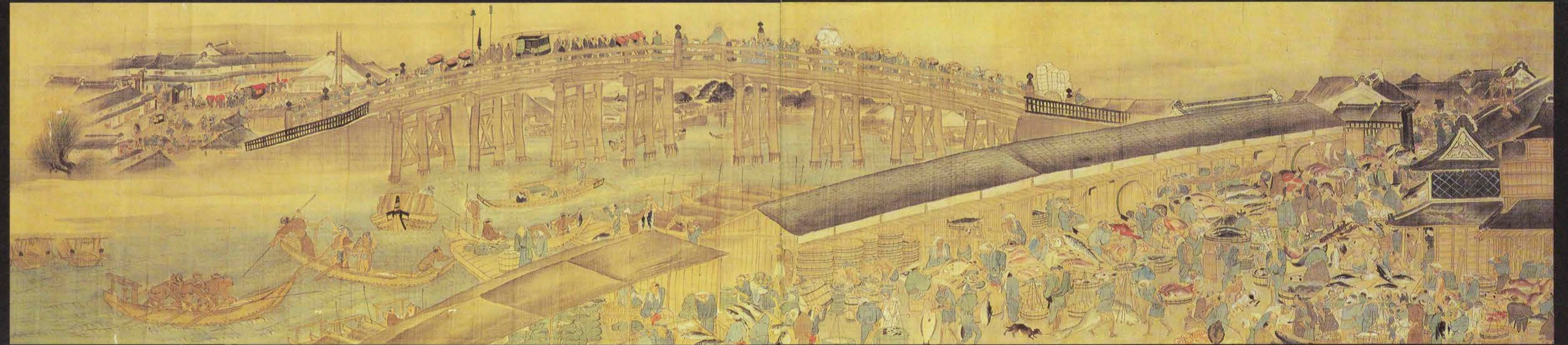
納屋裏(川沿いの荷揚げ場)の寸法については、道路幅から推定して約七メートルとした。ここはオープンスペースであり、適当な間隔を置いて井戸があった。日本橋川を上ってきた押送船の荷を、ここで仕分けして、仲買人に渡したのであろう。川沿いの岸は、石積みみの岸壁で、そこから川に向かって犬走り(栈橋)が伸びていた。明治二十二年発行の『日本橋魚市場沿革紀要』には、栈橋と並んで平田船(修羅太船)という浮き栈橋代わりの船があったと記述されている。平田船は、元は石積み船で、江戸期にはここに十六隻あったともいわれる。しかし、浮世絵からは正確な形が限定できないので、今回の復元の対象からは除外した。

作業を終えて

日本橋魚河岸は、百万都市・江戸の台所といわれた場所である。しかも、関東大震災まで同じ場所に存在したのだから、当初はかなりの資料が残っていると考えていた。ところが実際には、建築的な資料は意外なほど少なく、改めて驚かされる思いであった。例えば浮世絵一つを見ても、同時代の絵師でありながら作品ごとに建物の様子がかなり違って、確定しづらいのである。そうした中で今回は、『肴納屋由緒』の権利図面を基礎として、江戸ッ子の心意気を培った魚河岸という「場」の復元を試みたつもりである。現在では、日本橋から江戸橋にかけての河岸に魚河岸があったことを知る人すら少なくななりつつある。そんな折、魚河岸を見直す一つの契機となれば幸いである。

今回の作業にあたり、東京工業大学教授・平井聖氏、日本工業大学講師・波多野純氏、日本海事学会理事・石井謙治氏、中村地図研究所・中村静夫氏にご協力いただきました。お礼申し上げます。

〔参考文献〕『魚河岸百年』近藤正弥、日刊食料新聞社、(新修)日本橋区史、東京市日本橋区役所、(日本橋魚市場沿革紀要)、日本橋魚会所、(守貞漫稿)、著多川守貞、(江戸はんばい四〇〇年)、東洋経済新聞社、(三田村寛魚全集(七)(十))中央公論社、その他



「東都繁昌図巻」嶽形憲斎 (写真提供：朝日新聞社)